

ロイ・カトーンの祭り

タイ国にみる供養のすがた

善光寺海外留学僧派遣育英会常務理事
龍光寺住職

佐藤 俊明

ハプニング

何年ぶりかで降り立ったドンムアン空港は、昔日の面影を全くとどめない、素晴らしい大空港に生まれ変わっており、二十三時というのに大勢の乗降客でにぎわっていた。日本の空港はすべてひっそり閑としていてであろうこの時刻のこの雑踏に、この国の強烈なエネルギーが感じられた。

タイとわが国との時差は二時間なので、日本では夜中の一時。思えば一昨年カルカッタに到着したのもこの時刻だった。しかしバンコックは、あの乾いたモヤのようなものにすっぽり包まれた不透明なぼやけた夜景ではなく、空気は澄んでいたし、「マナー」「マナー」と手を差しのべる子供の姿も見えないのでホッとしたが、タイのガイドもインドと同じようにいう。「盗難に注意してください」と。

「トーン・アジアだもの、仕方ないサ」と、人ごとのように聞いていたが、この傍観者的な態度に灸をすえられるようなハプニングが起きた。

ホテルに着いて部屋もきまり、ドアのノックに、ボーイがトランクを持って来たのかと思つたら、「ニモツ・アリマセン」という。添乗員のルーム・ナンバーも聞き漏らしているし、言葉も通じない、おまけに真夜中、さて困つた、これは隣室の黒田師をわずらわす以外に手はないと思ひ、早速ノックして事情を述べると、即行動を開始してくれた。

不安の中でいろいろな思いが去来する。十年前、仏像奉迎のためツアーを組んでワット・パクナムにやって来たとき(後述)、団員の一人の荷物が空港におろされず、終点のロンドンまで持つてゆかれ、旅行が終わつて帰国の日に空港で受け取つたことがあつたし、また、それより

二年前ワット・パクナムに持つて来た『南伝大藏経』がスリランカまで持つてゆかれたこともあつた。しかし今回の場合は空港で確かにバスに積み込んだのだから身辺にあることは間違いない。しかし、盗難に遭わないという保証は何もない。

黒田師がフロント、添乗員、現地のガイドに折衝した結果、トランクはホテルには持ち込まれてないし、どうもバスの腹の中に入つてゐるらしいことがわかつた。しかし、白色の一番目立つトランクがよりもよつて置き忘れられるとは、これまた解せないところだつた。やはり盗難に遭つたのかなアと案じながらシャワーを浴びてベッドに入った。

二時半、電話のベルがなつた。「センセイ・ニモツ、アリマシタ。モツテユキマス」
こうしてようやくトランクと対面することゝできた。やはりバスの腹の中にあつたそうで、と

んだ旅の幕開けとなった。

ツアーの目的

さきにガンジス河の灯明供養を描かれた日展審査員の石川響先生は、また、房州、誕生寺前の海での灯籠流しを描き、「流灯」と題して誕生寺に納められた。

今回のツアーは、スコタイの「キャンドル・フェステバル」をぜひ観たい、観ようではないかという、火と水と花の織り成す静かなる演技に魅せられた石川先生の絵心から生まれたものである。

キャンドル・フェステバル。タイ語でいえば「ロイ・カトーン」。ロイは浮かぶ、カトーンは丸い台を蓮華に型取り、上に線香やローソクをともしたもの。水に浮かべ、水に流す花灯のことであり、日本流にいえば「灯籠流し」である。

ロイ・カトーンは十一月の満月の夜、タイ国

全土でおこなわれているが、発祥の地スコタイのそれは特に美しく素晴らしい。タイを代表するこのスコタイのロイ・カトーンを観ることをメインに、バンコック、チェンマイ、そしてその中間にある有名寺院を参観することがこのツアーの目的で、名付けて「東方学院 タイ宗教文化の旅」(平成元年十一月八日～十五日)という。

あいにく中村元先生にはご参加がいただけなかったが、代わって学院総務の阿部慈園先生が終始、細部にわたって解説指導してくれたもので、総勢二十名、いずれも熱心な仏教研究者であり、日頃絵筆に親しんでいる人の集まりだった。

ワット・パクナムで供養修設

三、四時間のまどろみののち、七時ロビーに集まる。



タイのあいさつは、合掌してほほえみ、「サワデー」という耳にさわやかな響きを残す言葉である。美人から「サワッテイ」といわれたと云ってよろこぶ日本人もいるとか。さわやかなあいさつをかわす。

朝食後、一行とは別に、黒田師、駒澤氏と共にワット・パクナムに先行する。

せっかくバンコックの寺院を観光するのだから、日本と親しい間柄にあるワット・パクナムを訪れ、坊さんがたに食事を供養し、そこで昼食をいただくのではないか、という黒田師の提案と配慮によって、ワット・パクナム詣となったので、万遺漏なきよう事前の連絡のための先行であった。

交通渋滞のタクシーの中で、私はワット・パクナムとの出会いを反芻してみた。

昭和五十一年夏、『仏教タイムス』の主催で曹洞宗大本山総持寺の海外布教に関する座談会が

開かれた。当時私は総持寺の出版部長であり、布教師会事務局長を兼ねていたので出席要請を受け、この席ではじめて黒田師と出会った。席上、黒田師は、かつてワット・パクナムに安居した経験をふまえて、南方上座部仏教との交流を提唱され、師の提唱がみのつて翌年五十二年一月、総持寺では有史以来はじめての試みとして三人の雲水をワット・パクナムに送った。これは大乘仏教と上座部仏教の相互理解のために、またあとに続く留学僧の出現を期待するためにも、ぜひとも成功させたいことであり、ひろく世間に訴え、理解と協力を得るべきだと考えたので、私は三人の出発に際し、生活や修行についての手記を送ってくれるよう依頼した。ところが、一カ月経っても二カ月経ってもなんの音沙汰もない。言葉や気候風土ばかりでなく、同じ仏教とはいえ、あまりにも異質な要素を持つている上座部仏教の中に飛び込んだのだか

ら、そう易々と書けないのは当然、とは思いつつも、健康を害しているのではなからうか、心の張りを失っているのではあるまいかと案じられた。そこで、

「激励と取材にゆきたいが」

と話しかけたところ、黒田師は

「案内しましょう」

と、正に渡りに舟のひと言。

こうして六月、羽田を発ってドンムアン空港に着陸することになったわけだが、ムツとする熱気の中に三人の留学僧が出迎えてくれた。すっかり上座部仏教の比丘になり切っている彼らの姿に接した瞬間、杞憂は雲散霧消し、深い感動を覚えた。そしてワット、パクナムを訪れ、住職と副住職（日本人を父とし、タイ人を母とする人で、日本語に通じ、日タイ仏教の友好に大きな役割を果している）から、彼らが真面目に修行していること、喜んで後続者を受け入れ

たいという言葉を聞き、安心すると共に、はるばる足を運んだことの意義を確認したのだった。

その時、住職から、
「総持寺に仏像を寄進したい」といわれた。

「どのくらい大きなものですか」と問うと、

「身の丈二・三メートル」

とのこと、そんなに大きいのでは建物のことも考えねばならぬし、一存で返答しかねたので、一度帰って貫首禅師の意向を伺って返事すると約して別れた。

帰って岩本禅師に報告したところ、せっかくなので、十月、西村師（総持寺国際部長）・黒田師（同次長）と同道して、留学僧の研鑽の便を図ると共に謝意をあらわすものとして『南伝大藏

經』七十余冊を携行して参上、これを贈呈すると共に仏像奉呈の寄進状をいただいた。

一年有余ののち、

「仏像が完成したので、仏像寄付者の供養のため、日本僧侶による日本の法要をおこなってほしい」

との連絡があったので、五十四年春、ツアーを組んで奉迎の旅に出た。こうしてお迎えした仏像が総持寺宝物殿に安置してあり、タイ国の駐日大使が離着任の際にお詣りに来られる。

さて、総持寺の留学僧は三回目で事切れになってしまった。この時、黒田師の脳裡には、独力でも海外に留学僧を派遣しようという意欲と構想が湧いていたのであって、ようやくその機が熟した昭和五十九年、善光寺海外留学僧派遣育英会を結成し、翌年より留学僧を海外に派遣しており、ワット・パクナムには毎年二乃至三名を送っている。そんなわけで黒田師は年に兩

三度、ここを訪れている。去る八月には写真家の駒澤晃氏を伴って来訪しており、駒澤氏の写真と文章は『朝日新聞』（平成元年九月二十一日）の「にゆうす、らうんじ」欄を飾っている。このようにワット・パクナムと親しい間柄にある三人が先行したわけである。

手許にあるガイド・ブックではワット・パクナムを次のように紹介している。

古いトンブリ地区にもたくさんの寺があるが、チャオプラヤー河岸のワット・アルン（暁の寺）以外は、ほとんど観光客は足を向けない。数多くある寺の中でのお勧めは、ワット・パクナムという瞑想の寺。故プラ・モンコン・テムニ師が開いた瞑想修行のメッカで、学校や修道院も併設し、六〇〇人以上の僧や尼僧が境内に住んでいる。日本からも多くの仏教関係者がこの寺で学んでいる。本堂（注 布薩堂・ウボー

ソー）にはカッと眼を見開いたモンコン師そっくりの像があり、まるで生きているような豊かな表情に、像でなく本物の人間と思ひ込んで感動する人も少なくない。タマサートなどの舟着場から水上ボートで十五〜二十分ぐらい。運河の中にちよつとわかりにくい場所だ。

交通渋滞がひどく、一時間有余を費やして九時二十分ワット・パクナムに到着。十時に招待を受けて出かけるという副住職は門前で私どもの到着を待ち受けており、早速私達を本堂に請じ、住職共々快く歓待してくれた。

十時半に一行到着。黒田師の案内により食堂に入る。

上座部仏教の比丘は、仏戒に従って正午から翌朝に至るまでは固形物を口に入れてはならないので、食事は正午前に終わらなければならぬ。食事の前後には読経があるので十一時に

は食事をはじめなくてはならない。

また、食事は托鉢によって得たものを食するのであるが、このワット・パクナムでは托鉢に費やす時間を修学弁道にあてようと、前任職の時代から典座寮を整備し、十年ほど前りっぱな食堂（サーラー）が完成した。そして信者は金品を寺に持参して供養してくれることになっている。

私どもがサーラーに入った時はすでに食事を供養する大勢の信者が集まっていた。十一時、比丘たちが入堂し、禅堂の単のように一段高い座につき、展鉢読経をはじめた。

禅堂の食事を思えばよい。ただ、供養の施主があれば僧堂では知客和尚しかおしょうが香を焚きながら施主を引いて堂内を一巡するのだが、ここではその必要はない。というのは比丘の座は正面と右横にとつてあり、一段低い真ん中の広い場所は信者の席になっていて、信者は坐つて比丘の姿

を見渡すことができる。また香は焚かないし、施主の世話をしていたらひ比丘は食事の時を失つてしまう。香の代わりが、各自が小さな浄水の器をもっており、手指を洗い、堂を出るとき、その水を草木にそそいでいる。

比丘の食事が済むと住職は供養の施主一人一人にB4より少々小型の額に入れた領納書を読み上げて手交する。信者はこれをおし戴いて帰宅して部屋に飾り、感謝し、かつ供養したことを誇りとしている。時には子供までがお小遣いを供養に差出している。小額の供養には額に入らない領納書が渡されるが、子供たちは貰つて嬉々としている。

比丘の食事が終わったあと、供養の施主はそのおさがりを頂戴するのだが、私共一行には、便宜をはからつて比丘と同時に食事をさせてくれた。

品のいい一婦人が供養に来ており、私共のた

めにアイスクリームを全員に供養してくれた。
聞けば昨年、来日した際、十年前の総持寺留学
僧小林良禅君（長野県）がいろいろ世話をして
くれたことに対するお礼のしるしとのことだっ
た。

この国の人びとは、小さなタネが大きな樹木
に成長するように、たとえささやかなりとも供
養のタネを蒔けば、必ず大きな果報が約束され
ることを深く信じ、大は大なりに、小は小なりに
に常々供養に心を致し、特に仏法僧の三宝に供
養することを重視している。また、寺の門前で
は籠に入れた雀や亀などを売っている。これは
寺にお参りしたあと、その徳を他の生き物にも
分かち与えることによつてより豊かな幸福を得
ることができるとの信心によるもので、雀はそ
の場で空に放たれ、亀は水中に戻される。いわ
ゆる放生ほうじやうが日常の間におこなわれている。

三宝供養の心を忘れ、「放生」の言葉を知らな



いわが国の現状を思う時、この点はまことに羨ましい限りであると同時に、私共の布教と努力の足りなさを泌々反省させられる。

チェンマイからスコタイへ

ワット・パクナムを辞して、午后のひと時を有名寺院の拝観に過ごし、十六時半離陸、約一時間のフライトでチェンマイに着く。

チェンマイはバンコックに次ぐタイ国第二の都市で、バンコックから北に七〇〇キロ、海拔三〇〇メートルの高地にあるので、平均気温は摂氏二十五・六度という、しのぎやすい土地である。街並みは清楚で落着いる。人びとの肌色も白く、美人の産地といわれる。

チェンマイは古都で、市内には城門や城壁、堀や砦などが残っており、いかにも旧城下町といった風情で、日本でいえば京都を思わせるたがずまいである。

一二九二年、メンライ王ははじめチェンマイに都を開き、ついでこの地に都を移した。チェンマイとは「新しい都」という意味だそうて、ここにランナー・タイ王国が誕生した。この王国はインド文化をとり入れた結果、チェンマイはタイ北部の文化的中心として長く繁栄を誇った。寺もその頃から建設されたもので、ワット・ウモンなどは一二九六年にメンライ王によって建てられたという。大きな古いパゴダは、ロイ・カトーン祭りの日には美しいローソクの灯に包まれるという。また、ドイ・ステープ、ドイとは山の意、つまりステープ山はチェンマイの西十五キロにある標高一六七七メートルの山で、その中腹、一〇七三メートルにあるワット・プラタート・ドイ・ステープからはチェンマイの市街が一望できる。この寺は一三三三年、ジュエナ王によって建てられたものとのことで、チェンマイはバンコックとはひと味違った寺院

觀光の地でもある。

チェンマイに二泊して、十一月十一日朝、スコタイに向けて出発する。長いバスの旅である。

スコタイはチェンマイから南に約三〇〇キロメートル下がる。北部の山から降りて、中部の平野に出た地帯である。ここに一二三八年、最初のタイ人の王国が生まれた。前出メンライ王がランナー・タイ王朝を築いたのとはほぼ同時期



に、タイ族の別の集団がさらに南下して稲作に適した平野に到達し、当時クメール人が支配していたスコタイを攻略してここに都をつくり、タイ人のはじめての統一国家スコタイ王国を建設した。スコタイとは、梵語「スコーダヤ」の訛で、「幸福のあけぼの」を意味するという。

スコタイ朝の王は代々仏教の布教と保護に並々ならぬ熱意をみせたので、仏像をはじめ仏教美術はスコタイ独特の美しいのびやかな風格を生み出している。

一四三八年、アユタヤが直接統治するに至まで、スコタイ王朝は八代二〇〇年続いた。それは日本の鎌倉時代（一一九二～一三三三年）とほぼ同じ時代である。

ロイ・カトーンの祭り

朝から曇り空で、日本を思わせるような天気だった。しかし、雨季が終わったのだから雨に



はなるまいと思いがらバスに乗る。

九時過ぎ、バスのフロント・ガラスにポツ、ポツと小さな水玉模様があらわれて来た。＼やはり雨だ＼と思っていると九時二十分頃本格的な雨となった。ガイドはいう、

「ロイ・カトーンの雨です」と。

ロイ・カトーンの雨、そういえば、北国である私の郷里では、二月の十三、四日になると、きまつたように、うす汚れた雪の上に、美しい真っ白な雪が舞い降りてくる。これを「涅槃雪ねはんゆき」というのだと聞いたとき、私は感動したものだ。雪のない南国の釈尊のご入滅ごにじやくが雪で荘厳されるとは、なんて素晴らしいスケールの大きなことだろう、と。また、授戒会の時は、戒期中に一度は雨に見舞われる。ロイ・カトーンの雨は正に甘露の法雨である。

日本ではもはや見られなくなった「ピック・アップ」と称する、無蓋の小型貨物自動車が、

タイでは走っている。タイでは大事な必需品であり、荷物代わりに人がいっぱい乗っている。手に手にカトーンをもった彼らは、いずれも甘露の法雨を浴びて明るい表情をしている。一台だけではない、二台、三台、五・六台、すべてのクルマはスコタイへ、スコタイへと、ひた走りに走り続けている。今晚の前夜祭を觀にゆくのであろう。

日本の雨と違って実に思い切りがよく、五分後にはサツと晴れ上がった。たまに見る路傍の露天にはカトーンが並べられてある。カトーンは、丸形の台の上にバナナの葉で花の形をつくり、その上に、ローソク、線香を立て、供物を載せるものである。

正に天も地もロイ・カトーン一色の風景である、ロイ・カトーン、どうしてこれほどまでに人の心を惹くのであろう。チェンマイのホテルは、ロイ・カトーンの祭りを觀に来た客でいっ

ぱいだった。日本にはあまり紹介されてないせいか、会った日本人は数人に過ぎない。欧米人が一番多く、ついで台湾・韓国の人たちが目についた。スコタイのホテルは満配で泊まれないというので、私共は数十キロ離れたピサヌロークに宿をとらざるを得なかった。

ここで、ロイ・カトーンとは一体何なのかについて思いをめぐらしてみよう。

インドでは四月から七月にかけて雨季なので、釈尊は、四月十五日から七月十五日までの九十日間、弟子たちの外出を禁じ、一堂に会して修行させた。それを「雨安居うあんご」または「九旬安居くじゆんあんご」というのだということは小僧時代から教わってきた。ところでこの四月から七月というのは唐曆の示すところであり、しかも旧曆なのだから一カ月以上のズレがあるはずなのだが、それでもなお現地の実情とは合っていない。インドのことは論外として、タイでの雨季は七月

から十月にかけてであり、安居（パンサー）の始時と終時は年によって異なる。今年の安居の入り（カオ・パンサー）は七月十八日、安居の明け（オク・パンサー）は十月十四日だった。

バンコックの博物館で求めた『タイの花鳥風月』（レヌカーホムシカシントン著、めこん刊）「雨季（ルドゥー・フォン）」の章のリードには次のような文が綴られている。

降り注ぐ雨に潤って、生えて、伸びて、茂る緑。魚も亀も鱉も、溢れた河から泳ぎ出てきて、大騒ぎ。

大自然のエネルギーに圧倒された人間たちの雨季は、籠もりの時。三カ月と時を限って、青年たちは僧門に入り、戒律に生きる。愛する者の修行を支える女たちは、毎朝の托鉢に深い思いを託して、ひたすらに雨季明けを持ちわびる。

荒々しくきびしい冬の寒さから解放されて、

暖かく陽気な春を迎える時のよろこびを数十年間身にしみて味わって来た私には、この国の人びとの雨季明けを待つよろこびの情がよくわかるような気がする。

雨安居明けの七月十五日は、日本では孟蘭盆の行事がおこなわれる。即ち、神通第一の目連尊者が、今は亡き母が餓鬼道に堕ちて苦しんでいるのを見て、自らの神通力で救おうとしたが果たし得なかったので、釈尊に教えを仰ぐと、釈尊は、七月十五日、十方の修行僧が安居を終えて自恣の行（安居中の罪過を指摘し、また懺悔して、善に進む行事）を行う時、百味の食べ物、果物、香油、ローソク、臥具を用意して供養せよ。そうすれば父母祖先は餓鬼道や地獄の苦しみから救われるであろう、と教えられた。目連がその通り実行すると、母はその日のうち餓鬼道からすくわれたというのであって、これに従って中国や日本では孟蘭盆の行事がおこな

われてきた。

では、タイではどのような行事がおこなわれているのだろうか。「タイに与えた中国文化の影響」(敦賀女子短期大学専任講師・田辺和子『思想の動き』14 東方研究会所収)によると、

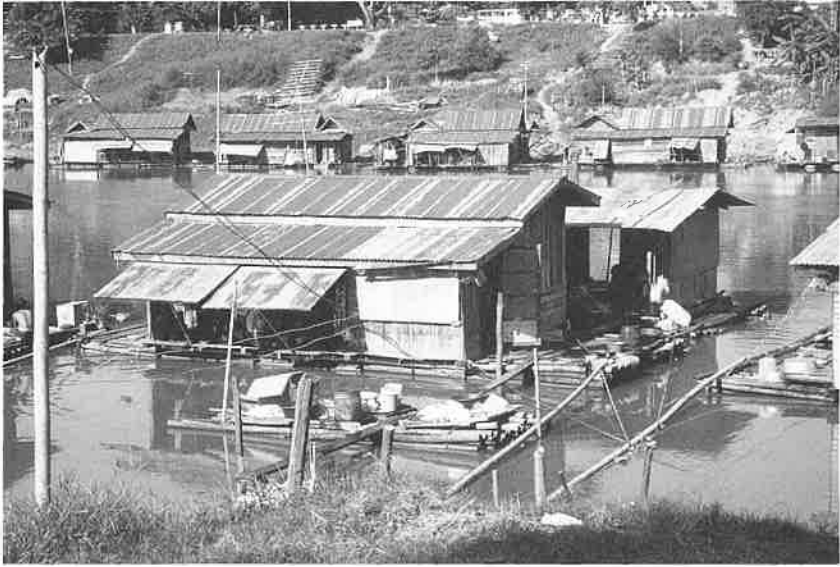
タイの人々は、自恣の日に供物を持って、ワットと呼ばれる寺院に集まり、テー・マハチャーという行事を盛大に行う。マハチャーとは、パリー語のマハージャーテイのことで、「偉大なる本生」という意味である。すなわち、慈悲のため子供や妻をも布施したというヴェッサンタラ王子の実践を伝えるヴェッサンタラ・ジャータカを比丘たちがかわるがわるに一日で読誦し、そしてそれについての法話を講ずるという行事である。(中略)〔これは〕「ヴェッサンタラ・ジャータカに述べられている、布施行や慈悲心の人々にまじめに実践することを奨励し

ているように思われる。)

また、タイでは、雨季の終わる自恣の日より一カ月後の満月の夜に、ロイ・カトーンと呼ばれる灯籠流しの行事が行われている。

タイにおける灯籠は、バナナの葉で花の形をつくり、その上にローソク、線香を立て、供物をのせて、川や運河、池などに浮かべてやる。川で溺れ死んだ人々の霊を導くためといわれたり、川の霊をなだめるためといわれている。

以上でご理解いただけたように、ロイ・カトーンは日本でいえば「灯籠流し」である。タイの正月は四月だという。すると十一月は正に日本のお盆の季節である。また、雨季明けて一カ月後といえば、日本では、冬の寒さから解放された一カ月後の花見の時期に相応する。ロイ・カトーンは正に、精霊供養を表に掲げた、日本



ピサヌロークはタイで一番水上生活者が多い

流に言えば、盆と正月をいっしょにしたような祭りであり、花見である。それだけににぎやかなものである。

ピサヌロークは、タイ中部と北部の接点に位置し、経済・交通の要衝として栄えてきた街で、あとで述べるアユタヤ時代には二十五年間タイの首都となったこともある。

十二年前、バンコックからここまで飛行機でやって来て、ここからクルマでスコタイに出かけたことがあるが、その頃の街は貧弱できたなく、ホテルは実にひどいものだった。それで、ピサヌロークに一泊すると聞いたときはいささかへきえきしたのだったが、来てみると街並みはすっかり変わっており、大きなホテルも軒をならべていたので安心した。

前述の、ワット・パクナムから総持寺に寄進された仏像は、プラプッタ・チナラートという、

タイではもつとも美しい仏像とされているのだが、この仏像は実はピサヌロークの北の方、ナン川の近くに建っているワット・プラシー・ラタナ・マハタートの本尊仏である。かつて、この地でビルマ軍の侵入を防ぎとめ、タイ国を護ったという靈験あらたかな仏像として有名である。昨年四月、黒田師がワット・パクナム住職・副住職を招いて、四人の子息の得度式を挙行した際、同じ仏像が黒田師の住持する横浜善光寺に寄進された。

さて、ピサヌロークのホテルを出て、十時半、スコタイに着く。

スコタイはかつてビルマとの戦いに破れて廢墟と化した。寺院の屋根と壁はすっかり焼け落ち、林立する巨大な焼け棒杭のような柱の間に露天の大仏が鎮座ましましてゐる。

二、三十年前、ユネスコも保存に協力した遺跡は、スコタイ歴史公園と、北方六十キロにあ

るシサチャナライ歴史公園の二カ所に分かれている。スコタイ歴史公園は、東西南北に四つの門を持つ城壁は、東西約二キロメートル、南北一・五キロメートルの中に数多くの寺院がある。大部分は戦禍を被った無残な姿をそのままとどめている。

正に祭りである、村の鎮守の祭りのあの雑踏を極限にまで拡大したような人、人、人の波。

交通が規制され、外国人観光客のバスは多少優遇されているものの欲するところまでクルマを進めるわけにはいかぬ。城外に駐車して、車外に出ると途端に熱気の襲撃を受けた。炎天での歩行は老体には全くこたえた。が、駒澤氏は重いカメラ・バックを担ぎ、

「仏さまは皆同じ方向に向いておられるから、午後はダメだ」

と、ぼやきながらも、角度を選び、汗だくにな

つて撮影を続けている。『えらいもんだなあ。弱音を吐いては罰が当たる』とは思いつつ『それにしても写真家にならなくてよかった』と、やはり弱音を吐く私だった。

午後の強烈な日射のもと歩行にはいささか参ってしまった私だったが、夕食済んで再度城内に入る頃は、「私も五時から男かなあ」といつてみんなを笑わせるほど元氣を取り戻した。

人混みは日中に数倍していた。無数の炬火が赤々と燃える中、爆竹は鳴る、子供は処かまわす火花を打ち上げる。しかし、ただ単なるお祭り騒ぎではない、露座の仏像の前には善男善女が列をなして香華灯燭を捧げ、合掌低頭している。

四方を掘て囲まれたワット・マハタートの、アユタヤ時代に再建されたという野ざらしの大仏はひときわ目を引く。その大仏にライトがあたりられ（これはいささかイメー・ジ・ダウンだった）

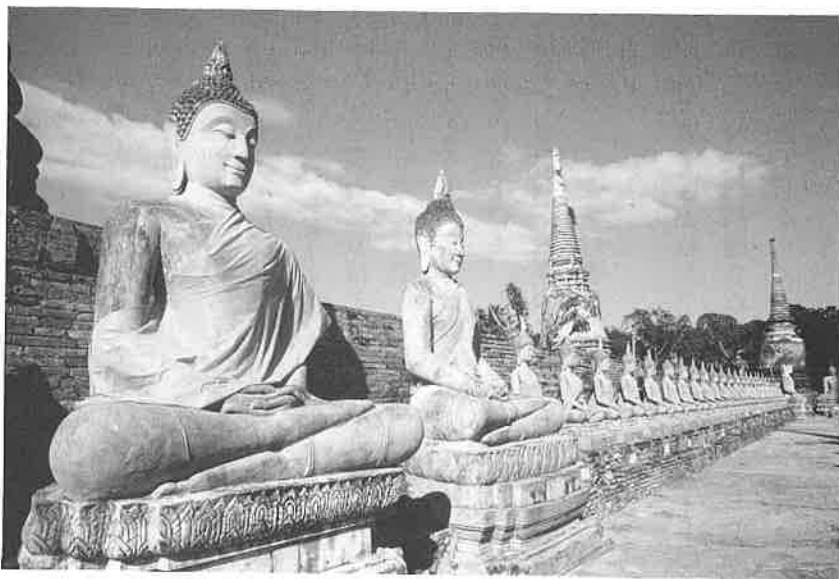
た）、その四圍の堀にたくさんのカトーンが浮かべられ、それを合掌で見守る人びとの姿。喧噪の中の静寂。それは日本では到底見ることできない美しい光景であり、敬虔な姿であった。

『地藏菩薩本願經』「利益存亡品第七」に、

もし男子女人ありて、在生に善因を修せず、おほく衆罪をつくるに、命終ののち、眷属小大、ために福利一切の聖事を造らば、七分の内、而も乃ち一を獲ん。六分の功德は、生者自ら利せん、是を以ての故に、未來現在の善男女等聞け、健かなるとき、自ら修せば、分々に己れに獲ん……

とあるが、供養することによって六分の功德に報いられることを堅く信じているものの姿のように見受けられた。

石川画伯と駒澤氏の素晴らしい絵と写真に相まみえること一日も早からんことを祈念してこの項を終わる。



ワット・ヤイ・チャイ・モンコン本堂を囲む沢山の釈尊坐像

アユタヤ

旅もいよいよ終盤を迎えるに至った。十四日朝、ピサヌロークを発ってアユタヤに向かう。バスで五時間の旅である。

アユタヤ王朝の興ったのは一三五〇年。タイ最初の統一国家として栄えたスクタイ王朝を滅ぼし、三十三代、四一七年長きにわたって栄えた王朝である。一七六七年、ビルマ軍の攻撃に破れ、国土は壊滅状態となった。その後反撃してビルマを撃退したが、タクシン王は、あまりにも無残な破壊ぶりに王都の再建を断念して、都をトングリ（ワット・パクナム所在の地）に移した。そしてトンブリ王朝は十五年間続いたのち一七八二年、バンコックに遷都して現在に至っている。今から七年前二百年祭が盛大にこなわれた。

アユタヤ王朝代々の王は仏教を保護し、スコ

タイ仏ののびやかな表情に代わって、クメール
仏の冷たく硬直した表現を模倣したアユタヤ洋
式の仏像が造られるようになった。

訪れた私共の眼にふれるものは、スコタイと
同様、石と煉瓦でできた廢墟である。しかし、
緑樹は美しい花をいただき、迦陵頻伽かりょうびんがはたのし
くさえずり、時の経つのを忘れさせる。ワット・
プラシサンペットの三つの白いパゴダは実に見
事なもので、十五世紀に建てられたが、十八世
紀にビルマ軍に破壊され、現在建っているもの
はバンコックに王朝が移ってから再建されたも
のという。

残念ながらこの日は火曜日、休館日で博物館
を観ることができなかつたが、ここで忘れてな
らないのは、山田長政と日本人町のことである。

アユタヤの街の南、チャオプラヤ河（メナム
河）の畔に旧日本人町跡がある。そこに三方国
語で書かれた三面の碑が立っている。フィルム

に納めて来たので、日本語文を転記すると次の
ようである。

アユタヤ日本人町跡と山田長政

アユタヤは西紀一三五〇年より、七六七年ま
で四一七年間タイ国の首都であつた。この間第
一六世紀後半より外国人の渡来者は漸増し、彼
らは貿易や布教に従事したほか、義勇兵として
王朝に仕えるものもあつた。当時日本政府は朱
印状（外国貿易に従事する許可書）を発行して
貿易を奨励したが、朱印状を所持しない交易船
も東南アジア方面の貿易に従事していた。これ
らの貿易船のうち、タイの都アユタヤに來たも
のも多く、彼らは外国人と同様、国王から居留
地を与えられた。アユタヤには時代により、八
〇〇人から三、〇〇〇人の日本人が居たと伝え
られ、更にタイ、中国、ヴェトナムなどの従業
員を加えると、この日本人町に八〇〇〇人の人
が居たこともあると伝えられている。そして次

の人々がその首領であった。オークプラ純金(一六〇〜一六一〇年)、城井久右エ門(一六一〇年〜一六一七年)、山田長政(一六一七年〜一六三〇年)、糸屋多右エ門、平松国助(一六三三年〜一六四〇年)、木村半左エ門、アントニオ善右エ門(一六四〇〜?)、この内でも山田長政(静岡県出身と伝えられている)は日本人義勇隊長として実力者となり、ソングタム王の寵愛を受け、オークヤー・セーナービムツクの爵位を授けられた。一六二八年、王の死後、長政は二人の王子に忠義を尽くしたが、ナコン・シータマラート(南タイ)に叛乱が起きたので、都を離れ、叛乱軍平定後、同地の太守となったが、程なく同地で客死した。

一九三五年(昭和一〇年)、バンコックに設立された泰日協会は、オランダ、東インド会社の文献に基づき、この地旧日本人町跡を発見し、その内、約七ライ半(一、二〇〇平方^{メートル}米)を入

手することが出来た。それ以来、泰国日本人会の協力援助を得て、この遺跡の保存に当たっている。

一九七二年二月一日

泰日協会長 ビヤ・マハ・サワン

いま、タイ国日本人会の手によって、記念資料館の建設が進められているが、黒田師は、記念館が出来てもお墓がなくては供養にならないとて、この記念館の近くに、山田長政以下日本人物故者のお墓をつくりたいものともくろみ、タイ国日本人会に折衝している。

むすび

アユタヤからバンコックまで七七キロメートルに過ぎないが、いずこも同じ車のラッシュユで、バンコックの国立博物館に着いたのは十一時を過ぎた頃だった。この博物館は東南アジアで最大規模のもので、ゆっくり見てまわると半日は

かかるというが、昼食前とてそんなに時間はとれず、さっと一巡して二時頃の昼食となった。ここで激辛のタイ料理に挑戦してみたが見事に敗退を喫した。

バンコックで最後の夜を過ごし、翌十五日は早朝七時にドンムアン空港を離陸して十四時四十五分、なんのハプニングもなく、無事成田の地を踏んだ。

阿部慈園先生をはじめ、同行各位のご芳情に厚く謝意を表してペンを擱く。

